

観天 望気

生産者と消費者が思い合う

工業から農業に転身して14年が経ちました。農業を通じた出会いから多くを学び、今では、農業は社会基盤産業であるがゆえにあらゆる社会機能と掛け算ができ、社会課題の解決に導くことができる唯一の産業であると確信しています。

産業化のなかで分業化が進み、作る人と食べる人の距離は大きく離れていきました。広い土地で大量に栽培し、遠く離れた消費者に分配する構造になったことで、消費者は誰がどこでどのように作ったかわからない農産物をただ食べ続け、生産者は誰がどう食べたかわからないまま作り続けてきました。グローバルにおいても、遠く離れた地域でお金を獲得するためにコーヒーを栽培し、主食を輸入しています。

円安と低成長で安くなった日本も、まさに同じ構造になりつつあります。日本産食材を高く購入するのは他国の富裕層であり、国民の食の豊かさが消えかねないと危惧しています。分業化と大規模化による食料生産の効率化は、増大する世界の人口に対して一定の役割を果たしたものの、環境破壊や薬剤摂取などにより人類の持続性を犠牲にしてきましたといえます。

そこで、「やさいバス」という事業を通じて、集約効率型から分散調和型生産を支え、普通においしいものをおいしく食べ続けられる状態をめざして流通改革にチャレンジしています。やさいバスは、農業者と消費者を情報と物流でつなげていく、ECと地域内共同配送を一体型にした仕組みです。仕組みを地域実装する過程において地域での協働は必要不可欠であり、離れてしまった農業者と消費者が互いに思い合う関係を再度築いていくこととなります。小さい取り組みですが、一人でも多くの人が農とかかわることが流通を変え、社会のゆがみを整えていく力になると信じています。年次に読まれる皆さまにも、日々普通においしく楽しく食べていくために、少しでも農に関心を寄せていただければ幸いです。



加藤 百合子

株式会社エムスクエア・ラボ 代表取締役

かとう ゆりこ

東京大学農学部卒業後、英国、米国で農業工学分野の研究に従事。帰国後は半導体や産業用機械を研究・開発していたが、農業の魅力にひかれ2009年エムスクエア・ラボを設立。「やさいバス」をはじめとして、農業と技術などの掛け算で社会課題を解決する事業創造を続けている。